カンボジア通信

カンボジア教育支援基金（KEAF-Japan）会報

2015年 9月　76号

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

16年度（2015.10－2016.9）奨学生は

高校生180人、教員養成所学生４人

大学生６人となりました。

カンボジアでは学年の終わる６月に、高校進学を目指している中学３年生のなかから KEAF 奨学生の学校推薦を受けた生徒たち、および奨学金をすでに受け取って1～2年を経過する2,3年生（10,11年生）に面接することを主な目的に、６月13日（土）から21日まで、岡宮喜雄さんとカンボジアの東部プレイベン州、ベトナムと国境を接するスバイリエン州の小中高校14校を訪問しました。訪問校は例年と同じです。以下がその報告です。現地での活動をより理解していただくために、旅程にしたがって日記風にまとめました（池内秀樹）。

◇プノンペンへ

6月13日(土)　成田12：40発アシアナ航空101便で韓国・仁川経由22：50プノンペン着。時差は２時間。

◇大学奨学生の都会生活

6月14日(日)　雨季に入ったとはいえ、日差しがさすがに強い。10:05ホテルで大学生奨学生５人と会う。ことし入学する男子学生ひとりを除く４人に奨学金（2015.9～2016.7分）を渡す。プノンペンでの生活について「慣れてきたがまだ道がよくわからない。田舎には帰りたくない」「昨年、プノンペンにできた日系のスーパー・イオンにも行ったが、高くてとても買い物はできなかった」というひとりの発言に、みんなうなずいていた。

12：00 プノンペン市内の文房具店で教材購入後、この教材と日本から運んだ会員などからの寄贈品を積んでプノンペンを車で出発。ベトナムに通じている国道１号線を行く。沿道にはところどころ火炎樹が橙色の花をつけて快晴の空に映える。

カンボジアとベトナム

「歴史と今」を訪ねる旅

KEAF シニア・ツアー第2次募集

（3頁をご覧ください）

◇はじめて渡る「つばさ橋」

メコン川の町ネッルーン。大河メコンがゆったりと流れている。これまではフェリーが唯一の交通手段だったが、日本の援助で４月に開通したばかりの「つばさばし」（全長2,200m）を KEAF としては初めて通過した。２本のつり橋が「つばさ」に似ているので、日本語そのままに命名されている。フェリーのときは2時間待ちもあったのに、あっという間に対岸に着く。橋のたもとには冷たい飲み物やランブータンなど季節の果物を売る屋台が並び、橋の中央部付近には車を止めた見物人が三々五々、メコン川を高い所から覗き込んでいて、格好の観光スポットになっていた（左上の写真）。

ネッルーン側のフェリーに乗るバイクの待機場はレストランに様変わりし、フランス植民地時代から優に100年は超えたと思われるフェリー乗り場には、放牧された牛が水辺で草を食んでいる。周辺の賑わいは消え、静かな町になっていた。この橋の完成でベトナムのホーチミンからプノンペン、あるいはシエムレアプを経てバンコクに至るインドシナ半島横断の幹線道路が出来た。

15：00 ネッルーンに戻り、定宿のチェアソクヴァンペン・ホテルへ。日程の確認、役割分担などミーティングと支援用教材などの仕分け。

08：50　タッコー高校訪問。補助教材を贈呈した後、面接開始。11年生（高校３年生）５人中３人（２人は退学）、10年生（同２年生）５人中４人の計７人。

現学年からの継続奨学生なので、この 1 年間の学業、家庭環境の変化、進路希望の変更の有無などを聞いた。11、12 年生については他校での面接も同じ。これから高校に進学する９年生（つまり中学３年生）６人に初めて面接する。どの生徒も進学できる希望からか、傍目にみてもまだ幼く初々しい。

午後は教員養成所生 2 人の面接、奨学金を渡す。次いで同じ手順でコンポントゥラバイ高校で面接。11 年生７人、10 年生８人、9 年生 4 人、教員養成所生 2 人。

15:30　この日の予定終了、ネッルーンに戻り、泊。

◇カンボジア式じゃんけん

6 月 16 日(火)　08：55　国道からそれて、未舗装のでこぼこ道を揺られながらゆっくり進む。ようやくベトナムと国境を接するスバイリエン州のアンサー小学校に着いた。壁掛け教材を提供。大き目のポスターサイズにカンボジア語と英語で記した動物図鑑、色の種類、世界の国旗、九九の掛け算などで、プノンペン市内の教材店で求めたものだ。先生たちも初めて目にするらしく寄ってきて感心することしきり。これならこどもたちも大喜びだろう。

09：50　チョーティアル中学校訪問。リエン校長らに補助教材を贈呈（右の写真；図書室の本が増えていた）。群馬県立渋川青翠高校などから提供されたサッカー用品のなかに、ひざがちょっと擦り切れた運動用ズボンがあった。ためらいながらどうかと差し出したとたん、リエン校長ら男性教師 3 人が名乗りをあげ、大声でカンボジア式じゃんけん（モイ・ビー・パイ。1,2,3 の意）で奪い合いになった。その真剣さにびっくりする。じゃんけんは日本と同じグー、チョキ、パーだったが、チョキだけ人差し指を突き出すこともある。この場合ハサミではなくキリをイメージしているのだと通訳のナット君。

11：00　水田のかなたに黒雲がわいているのに気づく。その下は灰色の霧のように見える。スコールが降っているのである。間もなくわれわれのいる方に来るだろうと予想していたら、パラパラとやってきた。かなりの強い雨だった。近くのお寺に車を止め、車のなかで、途中で買い求めたゆでトウモロコシを食べる。きょうの昼飯である。スコールは 1 時間ほどでやっとあがった。「ことしは何日もスコールがなかったり、あったり。あればきょうのように長かったりで、少し天候不順ですね」という。

12：30　プラティアート中学校訪問。９年生 12 人を面接。ここの生徒は卒業すると約 10 キロ離れたコンポントゥラバイ高校に自転車などで通学したり、高校近くで下宿したりするのだが、高校の新校舎（5 教室）が校庭で建設中だった。10 月の新学期からプラティアート高校としてスタートする。面接した生徒全員がここに進学することになった。近隣の３中学校の卒業生もここで学ぶことになり、生徒数 80 人を予定している、ということだ。ネッルーンに帰る途中、ほんの一部だが国道 1 号線が冠水し、のろのろ運転しなければならないところができていた。さっきのスコールの痕である。ネッルーン泊。

◇中退者の補充はしない

6 月 17 日(水)　08：05 プロモルプロム中高学校訪問。10、11 年生 64 人とことし入学する 9 年生 17 人を加えると 81 人と奨学生が最も多い。国道 1 号線のバイパス 102 号線沿いにあって首都からの情報が比較的入りやすいのか、ポーン校長は「今回も結婚（女性）、出稼ぎ（韓国、縫製工場）のため中途退学者がかなり出ました」と説明。

08：25　面接開始。10 年生は 31 人中 19 人、うち 10 人は中退者の入れ替え。欠席 2 人（病気１、交通事故１）11 年生は 33 人中 25 人、6 人は中退者の入れ替え。終日面接が続く。

午後遅くなってポーン校長と再び会談「中退者が出た場合、その枠にあらたに別の在校生を充てることは KEAF の財政状況から見て継続できない状況になっています」と KEAF の厳しい現状を説明。

①6 月時の面接を欠席した生徒は原則として支援を辞退したとみなす、②中途退学した場合はその時点で支援を打ち切る、③中途退学した生徒、あるいは 6 時の面接を欠席し、支援を辞退したと認定された生徒枠を別の在校生で補充しない－と理解を求めた。

ポーン校長は「教育省も奨学金は 3 年間を通して通学可能な生徒を推薦するようにと指導しており、私もそれに賛成します。中退者の支援打ち切りと補充はしないという点も分かりました」と約束した。これについては 15 日に訪問したコンポントゥラバイ高校でも KEAF の考え方を説明し、理解を得た。ネッルーン泊。

（3 頁中段に続く）

《カンボジア・ベトナム８日間の旅》に参加しませんか

歴史と文化、民族の悲劇と希望に触れ、豊かな自然と美味しい料理を楽しみ
皆さんが支援している農村の貧しいけど元気に学んでいる子どもたちを訪ねる

〈日程〉2016年2月16～23日（火）。訪問先はプノンペン、シエムレアプ、ホーチミン、ハノイなど。７泊（帰途の機中１泊を含む）８日間です。時期は乾季（11～3月）の過ごしやすい季節を選びました。

〈料金〉225,000円（16日夕食と17－22日の各３食を含む。飛行機はエコノミー、2名1室、10名以上）

〈シエムレアプ〉アンコールワットなどアンコール遺跡群の観光。淡水湖トンレサプをクルーで水上民族の村訪問、カンボジア民族ダンス鑑賞。

〈プノンペン〉王宮、博物館、プノムの丘、中央マーケット、カンボジア戦争取材中に亡くなった国際ジャーナリストの慰霊碑など訪問。KEAFが支援するプレイベン州の農村地帯（車で１時間半）をたずねて子どもや先生と交流。

〈ホーチミン〉ベトナム戦争終結の舞台となった旧大統領官邸、戦争博物館、ベンタイ市場の訪問、ドンコイ通りのショッピング。戦争中、米軍B52のじゅうたん爆撃を生き延びたクチ地下トンネル基地（ホーチミンから60キロ）にも足を延ばし、メコンデルタに浮かぶ「タイソン島」クルーズも。

〈ガイド〉全行程に日本語ガイドがつくほか、KEAF会長でベトナム・カンボジア戦争を現地取材した経験をもつ金子敦郎が同行して、両国の「歴史と今」についてガイド補助をつとめます。

〈連絡先〉KEAF info@keaf-japan.com / 金子敦郎
03-3418-7003/ att-akaneko@gol.com

（2頁からの続き）

6月18日（木）09：00　国道102号線をさらにベトナム国境に向かったところにあるバンティチャクライ中学校訪問。シアヌーク前国王のモニク妃誕生日で休日のため閑散としていた。校庭の木陰にあるテーブル、椅子で校長らの立ち会いの下に9年生8人を面接。全員10キロ離れたプロモルプロム高校進学を希望、自転車通学が多い。

01：45　ソンポン小学校訪問。閑散としている教員室で当番の先生に補助教材を贈呈。

12：45　道路が未舗装で車では行けないのでバイクをチャーター、後部座席にしがみつくようにしてプレイトープ小中学校を訪問。中学校長代理、地理担当(女性)、小学校校長先生の立ち会いで9年生8人を面接した。ネッルーン泊。

◇月額5ドルの重み実感

6月19日(金)

08：30 プレアンドゥン高校訪問。面接最終日だ。この高校は州都プレイベン市内にあり、支援校のなかで唯一コンピューター教室がある。10年生8人、11年生5人、9年生8人を面接した。9年生のなかで女子生徒2人、男子生徒1人の計3人の家庭環境が極めてきびしいことが分かった。

①父がいなく、母はプノンペンのレストランで長女とともに働いているため、小学校4年生の妹とともに母の知人の家に預けられ、母たちの仕送りで生活している女子生徒。②母は亡くなり、父も年老いて何の仕事もしていないため、プノンペンでバイクタクシーの運転手をしている兄と、結婚してやはりプノンペンに住む姉からの不定期の仕送りでやっと生活している男子生徒。②両親に捨てられ、年老いて働けないおばさんとふたり暮らし。収入の道がないので、近所の人の助けにすがって生きている女子生徒－というのである。

シンリー校長は「この3人は経済的にきわめて厳しい状況だが、一生懸命がんばっているし、生活上のマナーもよい子たちです。いずれも近くの孤児院から食費の補助を受けています」と言う。とくに3番目の生徒は手足に障害があり、「両親に捨てられた」のはそのためだという。カンボジアの社会では障害児に対する偏見が残っていて、親が隠そうとしたり、極端な場合、捨ててしまうこともまだある。この生徒への月額5ドルの奨学金の重みを感じた。

プレイベン、スバイリエン両州での日程を終えてプノンペンに戻り、大学を卒業したセン・シネト君、大学1年生のロナ・チャムロウン君に会う。セン君はことし無事卒業して「CAMBODIA POST BANK PLC」.に就職した。「奨学金支援のおかげで学費はもちろん負担が軽くなり助かった。無事卒業できたのもみなさんのおかげです」と晴れ晴れとしたようすだった。プノンペン泊。

6月20日(土) 10：45　プノンペン西の郊外、車で約50分のトゥールサンボウ小学校訪問。副校長、教員1人。チョーク（白、色）、A4用紙2包支援。23:55発アシアナ航空740便を仁川で乗り継ぎ、翌21日11：10成田帰着。

ありがとうございました　(2015年6月1日～8月24日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます（敬称略させていただきます）

※個人情報保護の為、お名前を伏せて掲載しております

[redacted](東京) [redacted](東京) [redacted](神奈川) [redacted](東京) [redacted](東京) [redacted](福岡) [redacted]
(福岡) [redacted](世田谷) [redacted](大阪) [redacted](東京) [redacted](東京) [redacted](東京) [redacted]
(東京) [redacted](東京) [redacted](東京) [redacted](神奈川) [redacted](神奈川) [redacted](埼玉) [redacted]
(東京) [redacted](神奈川) [redacted](東京) [redacted](千葉) [redacted](千葉) [redacted]
(群馬) [redacted](神奈川) [redacted](東京) [redacted](熊本) [redacted](東京) [redacted](神奈川) [redacted]
(神奈川) [redacted](東京) [redacted](神奈川) [redacted](埼玉) [redacted](東京) [redacted](埼玉) [redacted]
(東京) [redacted](京都) [redacted](埼玉) [redacted](大阪) [redacted](千葉) [redacted]((神奈川) [redacted](埼玉)
[redacted](長野) [redacted](大阪) [redacted](神奈川) [redacted](東京) [redacted](東京)

◇物品支援、ありがとうございます

[redacted](東京)：手提げバッグ1ダース、書類ファイル20冊、ボールペン50本、メモ帖30。

◇大ダムの建設競争―気がかりなメコン開発

東南アジアの大河、メコン川流域には全長54㌢と昆虫として世界で2番目に大きいナナフシの仲間や鋭い牙をもつコウモリなど、139種もの新種の生物が生息していることが分かった。世界自然保護基金（WWF）が6月、1年間の調査結果をまとめた報告書で明らかにした。他にも知られていない生物が多く生息している可能性が高いという。しかしメコン流域では多数のダム建設が進められており、この貴重な生態系も危険にさらされている（以上、プノンペン共同）。

メコン川は中国チベット高原に発してミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの5カ国を縫って南シナ海にそそぐ全長4千㌔超。世界10位のこの大河にすむ1,000種と言われる多様な魚類は地域住民の食糧・蛋白源。豊かな水が運ぶ堆積土はメコンデルタなど流域に米作をはじめとする豊かな農業を育んだ。この自然の恵みが6千万人の住民の生活と文化を発展させてきた。メコンはインドシナ文明の母ともいえる。

上流の中国は1990年代、経済発展のためのエネルギーを求めて水力発電用の大ダム建設を始め、既に6カ所が稼働、6カ所で建設中のほか、さらに数カ所に建設を計画している。下流に当たるラオスも9カ所、カンボジアも2カ所にダム建設を計画、タイとベトナムも続こうとしている。貧しいラオスは発電量の8割はタイやベトナムに輸出する「東南アジアのバッテリー」を目指している。

だが中国に加えてラオスにも大規模ダムが乱立すればメコンの生態系は破壊されて、下流国住民（特にカンボジアとベトナム）の生活と社会が破滅にもつながる影響を受ける恐れがある。ラオス、カンボジア、タイ、ベトナム4カ国は1995年メコン委員会をつくって話し合っているが、ダム建設を急ぐラオスと下流側との対立が解けない。環境団体などは大規模ダムに反対、小規模ダムと太陽光発電など自然エネルギーの組み合わせ、節電システムの開発に切り替えることで問題は解決できると主張している。

◇新刊紹介『核と反核の70年―恐怖と幻影のゲームの終焉』（金子敦郎　リベルタ出版、4320円）

筆者はＫＥＡＦ会長。毎日新聞書評欄（2015年8月30日）に掲載された書評の要旨を紹介します。

「『核なき世界』は実現するのか。本書は、広島・長崎への原爆投下から現在に至る米国の核政策と核廃絶に向けた流れを概観している。実際には核使用はかなり早い段階からタブー視されており、核に頼る抑止がいかに空疎なものであったかを描いている。

オバマ政権発足前に、キッシンジャー元国務長官ら超党派の外交安保分野の長老たちが『核抑止戦略は『時代遅れ』などと核廃絶を訴えた。その前にも対ソ強硬派の理論的支柱だったニッツェ元国務省政策企画室長が晩年、核兵器ではなく通常兵器の抑止に切り替えるよう求めた。政府高官や米軍幹部が引退後に次々と核廃絶を訴えているのは偶然とは言い難い。核抑止時代に幕を引くにはどうしたらいいかを考える際に、重要な視座を与えてくれる」